
間違われた男〔元禄編〕

沢木 絹

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

間違われた男〔元禄編〕

【コード】

N0081D

【作者名】

沢木 絹

【あらすじ】

空腹で行き倒れた現代人の俺。目覚めた所は元禄時代の江戸の町だった。

間違われた男〔元禄編〕

1 ここは何処だ（前書き）

有り得ない告白の真相を確かめたくて、突然姿を消した親友を捜していた。彼が自殺したと聞かされても、どうしても受け入れる事が出来ず、南の大都市を目指していた。

“ ぼくは、ずっと君のことが好きだった。愛していたんだ”
智紘、何故そんなことを言う？

資金が底をつき、空腹のまま旅を続けていた俺は 。

1 ここは何処だ

「旦那、起きてくださいませ。旦那、旦那」
「？」

「良かった。いつまで経っても目を覚まさねえから、心配になっちゃって」

「？」

旅の途中、バイトが見つからず2日間食えなかった。公園で水を飲んで、空腹を誤魔化して立ち上がった時、立ち眩みを起こし……。

俺は行き倒れ、この親切な男に助けられたらしい。

妙な男だ。

着物を着て鬘を結っている。

京都・太秦うすまさ、こんな格好をした人間がいる所は映画の撮影所しか思い浮かばない。だがあの公園はもつと田舎町の、働き口もないような寂れた街の、遊ぶ子供も見あたらない公園だったはずだ。

妙に足下が寒いと思ったら、布団からよつきり足先が出ている。子供用の布団に寝かされていたのか。

「旦那、大丈夫ですかい？いくら武士は食わねど高楊枝だったって、追い剥ぎに遭って行き倒れてちゃしょうがねえですぜ」

「武士？」

「良かった。言葉は通じるようだ。旦那でけえし、妙ちくりんな物をはいてるから、異人か天狗だったらどうしようかと思いやして。

でも、鼻は高くねえし、顔は赤くねえし、薩摩か長崎のお方で？」

「俺は役者のバイトをしているのでしょうか？」

背に腹は替えられない、食わしてもらえれば取り敢えず良い、とも思つて転がり込んだのだろう。この薄汚さは旅回りの貧乏劇団に違いない。裏方じゃなくて役者をさせられているなんて、俳優の人数もままならないのだろう。俺は武士の役を演じているようだが、公園からここまでの記憶が全くない。

「バイト？何のこつてすかい、そりゃ？旦那は役者くずれなんですかい？道理で手にやつとうダコがねえと思った。……こりゃ、とんだ目論見違いだ。良い儲けになると思ったのに、とんだ疫病神を捨ててきちまったのか」

男は残念そうに舌打ちをした。

「あの、俺はどんな役をやっているんでしょうか？台本を見せていただけませんか？」

「おつむまでイカレちまっているようだ。おつといけねえ、お

春ちゃん、お春ちゃん！」

慌てて立ち上がった男は、立て付けの悪い引き戸をガラガラいわせて出て行ってしまった。

「ちよつと待って！！！」

俺は、慌てて男の後を追った。何もわからないまま、ここに置き去りにされては困る。

男の後を追って外に出ると、道路はアスファルトではなく、土で出来た狭い通りに、薄汚い平屋の長屋。

やっぱりここは太秦の撮影所なのか？

時代劇で見慣れた井戸の周りに、長屋のおかみさんが4〜5人、まさに井戸端会議をしていたようだ。青っぱなを垂らして、継ぎ接ぎだらけの着物を着た子供達は、口を開いてこちらを見、道具箱を担いだ大工、長屋のご隠居さん……。全員が凍り付いたようにこちらを見ている。

「キヤーツー！！」

絹を裂くような若い娘の叫び声で、止まっていた時間が動き出した。

さっきの男と一緒にいる所を見ると、彼女がお春ちゃんなのだろう。土鍋を持ったまま、わなわなと震えている。

全員の視線が一点に集中していた。

俺の股間、いや、ユクロの白のブリーフに。

俺はパンツ一丁で人前に立ちはだかっていたのだ。ターミネータ

間違われた男〔元禄編〕

「バージョーン」（素っ裸！）じゃなかった事が、せめてもの救いだ。

2 貧乏長屋

「で、このお方をここにお連れしたのは半次なのじゃな」

「へえ」

「なぜ番屋に届け出なかった」

「いくら何でもお武家さんがざんばら髪で素っ裸じゃ、みっともねえだろうと思いやして」

さつきは儲け話に俺を利用しようとしていたくせに、話が違う。

男は半次という名前らしい。背は小さいがハンサムだ。半次だけではなくみんな小柄だ。190センチの俺が馬鹿みたいにでかく思える。目撃者全員が、半次の狭い長屋に押し掛けてきている。ぼろ屋の床が抜けないか心配だ。司会進行は年の功、長屋のご隠居さんだ。

俺は、お春ちゃんが持っていた土鍋の中身のお粥を平らげて、布団を肩から掛けて話に混ざっていた。

ふと気付く。これは芝居じゃない。夢？夢じゃなければタイムトリップ……んな訳がない。夢なら夢でこの状況を楽しむ事にした。もしかしたら凍死寸前、最後の楽しい夢でも見ているのかも知れない。

マッチ売りの少女か？俺は。

「何をニヤニヤしていなさるのです？我々は貴方のこれからの事を話し合っているのですぞ。ところで、まだ貴方様のお名前も伺っておりません」

「広木稲作と申します」

「ほら、名字がある、やっぱりお武家だ」

「半次さん？」

「へえ、半次っていうケチな野郎でござんす」

「名字は？」

「ありやせん」

「焼津の、じゃ？」

地元に「焼津の半次」という名の居酒屋があった。マグロ料理がうまかったのだ。

「あつしは焼津の出じゃありやせん。相模でして」

「相模の半次？」

「いえ」

「ただの半次？」

「へえ、仲間には「ピンぞろの半次」と呼ばれていやす」

テレながらいった半次に、一同は笑ったが、俺には何が可笑しいのかわからない。

さつきから、お春ちゃんの視線が気になっている。彼女は俺のブリーフが気になってしょうがないらしい。目が合うと、真っ赤になつて両手で顔を覆った。可愛い娘だ。

「えっへん。ところで広木様、貴方様はどちらからおいで？」

どう答えればいいのか。21世紀？平成時代？群馬県？行き倒れた所は何県だっけ？

「生国くわにこくですよ、旦那。お生まれはどちらで？」

「群馬県です」

「ぐんまけん？」

全員が顔を見合わせて首をひねっている。

「いえ、上野じょうのです」

「上州じょうしゅうですかい？ダチだちに上州新田郡じょうしゅうしんたんだいごほりの野郎やろうがいるんです」

「紋次郎？」

と、いつても、羨ましいのか恐ろしいのか14万頭もの子孫を残す、俺たち農家で名高い天下の名種牛「紋次郎」の事ではない。上州新田郡三日月村出身の渡世人「木枯らし紋次郎」の事だ。彼は架空の人物だが、群馬には三日月村というレジャー施設があるのだ。今でいうテーマパークのはしりだ。

「いえ、佐太郎ですが」

どうも話がかみ合わない。そうこうしているうちに大工の熊さん

が息を切らして飛び込んできた。

「ご隠居、一番寸法がでかいのがこれだ」

俺は、ふんどしを締められ、洗いすぎて黒が茶色になってしまった小さい古着の着物を着せられ、お春ちゃんに髪を束ねてもらった。見慣れているからなのか、お春ちゃんはふんどしなら気にならないらしい。俺は大いに気になる。尻がスーサーして風邪をひきそうだ。「旦那、言つときやすがこの刀は竹光たけみつですからね。十分お気を付けになってくださいえよ」

と、半次。

持つ者を狂わせるといふ村正のような妖刀なのだろうか？

「広木様、もちろん今すぐにとは申しませんが、締めて1両と2分かかりましてな」

「立て替えてくれるのか？」

「はい」

「わかった。後で返す」

「旦那！何がわかったです。……ご隠居、そりゃいくら何でも非道すぎる。このお方は何もわかってねえんだから」

半次の抗議で借金は2分に負けてもらった。俺の借金は3分の1に減つたらしい。それでもご隠居さんは満足そうだ。

「なんだか、坂本龍馬みたいだな」

鏡を見ながら呟くと、

「友達か？」

と、お春ちゃん。

彼女は龍馬を知らない。

「ところで、今は何年なんだろう？」

「旦那は面白いお人だね。元禄15年だよ」

3 定番の内職

「旦那、この長屋から外に出ちゃいけやせんぜ。1人で出歩くとまた昨日みたいに身ぐるみ剥がれる事になりやすから」

半次はそう言うつと出ていった。

午前中は、おかみさん達に言われるままに水汲みだのドブさらいだのを手伝い、子供達に読み書きを教えた一（学校の成績非優秀のこの俺が）。

やる事がないから、お春ちゃんの家に行き、裁縫するのを見ていた。

「旦那、裁縫が珍しいかね？これが仕立て終わったら、旦那の縫つてやるから。その着物はつんつるてんだもんね」

屈託なく笑うお春ちゃんは可愛い。部屋の隅に座ったお春のじいさんが、心配そうにこちらを見ている。

「じいちゃん、出掛けて大丈夫だよ。このお人は見た目ほど恐くないから」

孫娘に何かされないか心配だったようだ。じいさんはよろよろ立ち上がって出ていこうとする。

「どこに行くんだ？」

「べつに」

「行く所がねえんなら、じいさんここに横になれ」

じいさんは素直に横になった。この時代の人は侍の言う事には絶対服従なのだろうか。

触ると、身体がカチカチになっていく。どうしても俺の事が恐いらしい。じいさんにとって、お春を守る事は命を懸けるって事なんだろう。

「何をするんじや！」

「俺、金ねえから、マッサージぐらいしかしてやれねえ。こう見えても上手いんだぜ」

「触るな！何を」

「マツサーじゃなくて、按摩をしてやるって言っているんだ。身体
の力を抜け」

俺のでかい手は按摩向きだと、死んだ祖母さんによく褒められた
—（のか？）ものだ。

「やっぱり旦那は面白いお人だ。半次さんも旦那みたいに優しけれ
ばいいのに」

お春は半次が好きなのだろう。だが彼は、時代劇でもよく登場す
る典型的な‘遊び人’だ。正業に就けば二人は結婚出来るだろうに。
「親切な男だ」

「どうだかね。旦那がもう少し世間並みだったら、今頃何させられ
てるかわかったものじゃない」

「俺に出来る事だったら手伝う」

「出来ないから、置いていかれたんだよ。……用心棒か、道場破り
か、大道芸か、そんな所か」

「それ、儲かるのか？」

「やりようによっちゃあね。でも」

「俺には無理か」

「旦那は按摩が上手だのお。……隣のござつくババアの腰も揉んで
やってくれんかのお」

すっかり弛緩したじいさんは、夢見心地で言った。

「いいぜ、後で呼んで来な」

ガラガラと引き戸が開き、半次が言った。

「旦那、こんな所に居なすった。当面の仕事を用意しやしたぜ。食
い扶持ぐらいは稼いでいただかねえと」

「シート、じいさん寝ちまつたぜ」

半次が用意してくれたのは、内職だった。

これまた時代劇、貧乏浪人定番の仕事、傘張りだ。

4 初めての散歩

江戸の町はごみごみしているが、高層ビルがないし排気ガスもない。風も日の光も気持ちがいい。

半次とお春に、初めて町を案内してもらっている。

「美味かったなあ」

時代劇のセットで出てくるような蕎麦屋、田毎庵、を後にした俺は言った。

「何がです？」

「酒と蕎麦」

「皮肉ですかい？旦那。水で薄めたような安酒と、ほとんどつなぎの白つちやけた蕎麦だったじゃねえですか」

それだって、水は天然水、蕎麦にしても、つゆにしても、科学的に作られた物は一切入っていないのだ。全てが自然の恵み、人の手作業で作られている。床屋で読んだ‘美味 んぼ’の主人公が、本物本物と言っている意味がわかったような気がした。俺は今まで本物なんて口にしたことがなかったのだ。

醸造用アルコールで度数だけ上げてあるカップ酒や、アミノ酸のうまみ調味料たっぷりのカップ蕎麦。食費まで手が回らなかった俺はそういう食い物で過ごすことが多かった。

「祭りみたいだな」

半次は真っ直ぐ歩かず、あっちに行つては娘をからかい、こっちに行つては店の者に怒鳴られている。落ち着きがない男だ。

「お春ちゃん！」

お春ちゃんの肩を叩いて振り向かせた半次は、被っていたひよつとこの面を外しても、ひよつと顔だ。目を寄せ口をとがらせている。

「いやだあ、半次さん」

お春ちゃんは笑い転げた。

「ところで、聞いてなかつたんですが、旦那お幾つで？」

今度は風車を吹いて回しながら言った。彼こそ年齢不詳だ。言動は小学生並み。

「19だ」

「うつそー！あたしより年下なのかい？」

すかさず反応したのはお春ちゃん。

「お春ちゃん、いき遅れだもんな。……それにしても旦那、何を食うとそんなにでかくなるんで？」

彼女をいき遅れにしている責任を、微塵も感じていないらしい。

「半次さんは？」

「26でさあ。……旦那、どうも男にさん付けされるのはしっくりいかねえ。半次と呼び捨ててやっておくんなせえ」

大人に旦那と言われるのも、呼び捨てるのも、どうかと思うが口に出さない事にした。

「キヤーツ！」

茶店の前にさしかかると、あちらこちらから悲鳴が聞こえた。

縁台でひとり、団子を食べていたじいさんが、大きな犬に吠えかかられていた。上等な着物を着て、上品な白い顎髭を蓄えたご隠居さんだ。杖で犬を叩こうとしている。

人々は彼を遠巻きに見ているだけで、誰も助けようとしな

「旦那、かかわっちゃいけません！！」

俺は、犬とじいさんの間に割って入ってしゃがみ込んだ。利口そうな秋田犬だ。

「何が気にいらねえんだ？」

「ガウーツ！」

「じいさん団子をもらうぜ。……ほら、食いな」

団子を一つ外して犬の前に投げると、ぱくりと食べた。もう一つ投げる。

最後の一つは手のひらに置く。

犬は団子を食べた後、手のひらまでなめた。腹が減っていただけだ。

団子屋の婆さんが震えながら、まだ串に刺していない団子を皿の上に盛ってきた。犬はおとなしく食べ始め、観衆の緊張は一気にほぐれた。

それにしても過剰な反応。江戸の人はそんなに犬が嫌いなのか。

「旦那っ！！」

喜んでひっくり返っている犬の腹を撫でていると、お春ちゃんが泣きながら寄ってきた。

「だからあんたを一人には出来ねえんだ」

おちゃらけ者の半次は顔面蒼白だ。今なら女にもてそうだ。原宿を歩いているとスカウトされるかも知れない。

「？」

「わしが、叩き殺してやったものを」

縁台に座っていたじいさんが落ち着き払った声で言った。

「じいさん、滅多な事を言うもんじゃねえ」

周りを気にしている半次は、やはりテレビに出てくる小者の遊び人なのだ。まだ顔色が悪い。

「そうだが、生き物を殺すと極楽にいけねえよ、じいさん。こんなに可愛いのに」

起き上がった犬は、俺の顔をペロペロなめ回している。

「旦那、死にてえんですかい？」

「犬になめられると死ぬのか？この犬、なんかの病原菌に感染しているのか？」

「何を言ってる」

「すみませんご隠居さん、この旦那おつむのネジが2、3本弛んでますんで。あっしは1本だけなんです」

じいさんは、「かっかっかっか」と笑った。どっかで聞いた事があるような笑い声だ。「面白い奴じゃのお。田舎から上ってきた

間違われた男〔元禄編〕

ばかりと見える」

5 犬騒動

ピューッと飛んできた何かが、袖に当たって落ちた。
古銭だ。

真ん中に四角い穴が空いているそれには、寛永通宝と書かれている。

「銭形の旦那、このじじいと三三さんびんでさあ」

今度は、岡っ引きの登場だ。下っ引きを二人従えている。見物人が通報したのだ。

銭形つて事は。

「神田明神下の左平だ！おとなしくお縄をちょうだいしろい！」
あららっ、ちよつと名前が違う。

「じいさん、俺達、何か法に触れる事やったのか？」

「やりそうだからしよっ引いて吐かせるんだよ。叩けば埃が出そう
だぜ」

非道く乱暴な岡っ引きだ。

「助さん、少し懲らしめてやりなさい。わしは今朝からイライラして居るのじゃ」

助さん？俺の事か？

「じいさん、いらいらするのはカルシウム不足だ。年寄りには転ぶと骨折するぜ。小魚を骨ごと食いな」

「お前は訳のわからん事ばかり言い居る。わしが許す。叩き切つて
しまいなさい」

穏やかな口調の割に、言う言葉は過激だ。切れったって、刀など使った事はないし、人殺しは嫌だ。それに、この刀は妖刀なのだ。抜けば何が起こるかわからない。

身体がガタガタ震えだした。

「何をして居る！その腰のモノはただの飾りか！！」

「へえ、ただの飾りなんで」

半次が消え入るような声で言った。

「なに？」

「そいつは竹光、竹で出来たオモチャなんで」

竹で出来てるー！？」

竹刀しなと同じか。道理で軽いと思った。じゃ、少しぐらい叩いても死にはしない。

俄然、元気が出た俺は、刀を抜いて構えた。剣道は、授業でやった事がある。俺のリーチの長さは誰よりも有利だったのだ。

「小手！小手！小手！　めーん！！」

3人の十手を叩き落とした。最後の面は、左平へのプレゼント。ちったあ真面目な捜査をしゃがれ。

「旦那、何なんです？その妙ちくりんな掛け声は」

「大声を出して相手を威圧しろと教わったんだよ、先生に」

「何流じゃ？」

「知らねえ」

「覚えていやがれ！！」

時代劇ではチンピラが吐く捨てぜりふを残し、左平達は走り去った。助っ人を呼びに行ったのだろう。

「半次、追っ手が来ないうちにじいさんを家に送ってくる」

俺はじいさんを背負って走り出した。やっぱり、足の間でヒラヒラしてるふんどしが気になる。

「旦那ー！一人で行って、帰って来られるんですかーい？　てえ

した韋駄天走りだ！……お春ちゃん、先に長屋に戻っていてくれ。

旦那ー待っておくんないー！！」

6 1 隠居さんの正体

縮緬問屋の、越後屋。それがじいさんの店だった。越後の縮緬問屋じゃない。

「危ねえ所だったんだぜ。この旦那が割って入ってくださるなきゃ、このじいさん、お犬様を殺める所だったんだ」

半次は偉そうに腰掛けて言った。さつきは青くなって怯えていたくせに。

越後屋の主人は床に額を擦り付けて感謝している。

じいさんは、おかみさんに泣きながら小言を言われているのに、素知らぬ顔でお茶をすすっている。

「助さん、晩飯はまだかのう」

「おとつつあん、この人はあなたのがれの格太郎ではありませんか。手代の助造はまだ外回りから戻ってきておりません」

おかみさんは、また涙を拭った。

「本当にありがとうございます」

主人は小さな包みを半次の袖に入れながら言った。

「もうじいさんから目を離すんじゃねえぜ。旦那、帰りやしよう」

「旦那、どうなすったんで、ため息なんか付いて」

「いや、何でこんなに大騒ぎをするんだろうと思つて。呆けたじいさんが、犬を叩いた所でどうつて事はないと思つが」

言葉にした事もそうだが、俺は、もう一つ違う理由でため息を付いたのだ。あのじいさん、水戸黄門なんじゃないかと思つたのだ。

江戸時代なんだし、ウロウロしていないとは限らない。初めて会う有名人かと思つたのに。

「死罪。御店も開けていられなくなるでしょうね。そうしたら、一家全員で首くくりだ」

「死罪！？犬を殺すと？」

どっかで聞いた事がある。

「さいですが。まさか旦那、知らなかったなんて言いやせんよね？」

「……生類哀れみの令？」

俺は自信がないのに手を挙げて、指されてしまった生徒みたいに言った。

勉強嫌いの俺が覚えているはずがない。元禄15年は、天下の悪法、生類哀れみの令、発令真つ只中の時代だったのだ。

「公方様にご意見してくださる方が、亡くなっちまいやしたから。ますます住みにくい世の中になりやした」

「誰？」

「旦那、ほんとに大丈夫ですかい？つていうより、本当にこの国のお人で？やっぱり異人か天狗なんじゃ？水戸のご老公様ですぜ。一昨年お亡くなりになった時は、このあつしでさえ悲しかったんで」「会った事があるのか？」

「んなわけねえでしょう。ほとんどお国から出なかつたんだから」「諸国漫遊は？」

「旦那、いい加減にしておくんなせえよ」

もう徳川光圀はこの世に存在していないのだ。さっきの期待は外れるわけだ。300年前に死んだじいさんより2年前に死んだじいさんの方がより身近に感じた。

どうせ夢なら、どうして本物を出してくれないんだ。俺は凄腕でモテモテの侍という設定がよかつた。

「帰りたくなつた……」

「旦那、そんなに落ち込まねえでください。さっきもらった小遣いで、一杯引っかけていきやしょう！上等な酒と綺麗なおネエちゃんがいる店に。……異国でも、山ん中でも、帰る手だては、あつしが一緒に考えやすから」

7 間違われた男

手先は器用な方だ。傘張りの内職も板に付いた。長屋の連中もすっかりうち解け、子供も年寄りも俺の周りに集まるようになった。

江戸の町にも少し慣れ、半次達に町のルールも教えてもらい、一人歩きの許可も出た。

『巾着切りがいるから懐のモノに気を付けるように、旦那はいつも薄ぼんやりしていなさるんだから』お袋のような半次は、俺を一人にするのがどうしても心配なようだ。証拠に、お春と二人で、バレバレの尾行をしている。

長い夢だ。しかもなんの進展も意味もない。

見られているのは半次とお春にだけではない。町中の者が俺を見ていた。彼らには、半次が言うように、異人が天狗に見えるのかも知れない。

俺は、ここで、ずっと暮らしていくのか。

若い侍がぶつかって来た。

深編み笠で顔が見えない。これが巾着切り？

侍は俺の腕を掴むと、路地から路地へ。半次達の尾行をまくつもりらしい。

歩き回るうちに彼らは付いて来なくなり、若侍は、周りを気にしながら蕎麦屋に入った。

俺は完全に道に迷った。

向かい合って座った若侍は深編み笠を取り、俺の目を見た。

智絃！！

こういう事だったのか。なんて長い序章の夢なんだ。最後に、いい目を見させてくれるのか！？

ここで説明しなければならぬ。

有り得ない告白の真相を確かめたくて、突然姿を消した親友を捜していた。彼が自殺したと聞かされても、どうしても受け入れる事が出来ず、南の大都市を目指していた。

“ ぼくは、ずっと君のことが好きだった。愛していたんだ”

智紘、何故そんなことを言う？

資金が底をつき、空腹のまま旅を続けていたはずなのに、何故かこうしてここにいる。

「 様。なぜ、そのようなお姿に身をやつされているのです？なぜ、あのような者達に付け回されているのです？大夫たいふ様の密命を帯びて居られるのですか？……なぜ、そのように涙を流されるのです？」

「……」

「……武士として、恥ずかしくないのですか、堀部様」

この時の俺は、このとんでもない人違いに気付くはずもなかった。

8 時代劇のヒーロー

俺は蕎麦屋2階の座敷に連れて行かれた。既に5人の男が集まっている。浪人、町人、職人と、身なりは様々だ。句会なのか、筆と紙が用意されている。

「遅くなりました」

「弥兵衛殿はいかがなされた？」

「おい、安兵衛」

「つて、俺のこと？」

「お前なんだか瘦せたな」

「若くなつたような気もする」

「さては良い女でも出来たのか？」

「そんなことはお内儀殿とお父上が許すまい」

「あの、みなさん」

年上の男達の軽口を、智紘に似た若侍が遮った。彼は下世話な話が苦手なようだ。一緒になって軽口をたたき合うには若すぎるのだ。「すまんな、右衛門七^{えもんぢ}。今度お前にもいい目を見せに連れて行つてやろう。一度は覚えた方がよい」

「結構です、赤垣様」

右衛門七と呼ばれた智紘似の若侍は、頬を染め、怒つたように言つた。

「さて、それでは始めるか」

「待て！俺たち抜きで」

「！！」

一同啞然。俺とそっくりな男が老人と二人で入ってきた。

「一体こりゃ、どういふこつた？てめえは一体誰だい！！」

威勢のいい江戸弁。

「隠し子か？安兵衛」

「義父上、どうやったらこんなに大きな隠し子が出来る。俺はまだ33だ！」

俺は33歳の男と間違われたのだ。

「兄弟？」

「そんな奴がいるなんて、聞いてねえ！てめえ！なんなんだこいつあ」

安兵衛は俺の胸ぐらを掴んで立ち上がらせた。俺の方がずっと背が大きい。が、彼の腕の力は凄まじく強かった。

「申し訳ございません。人違いで、私が連れて参りました」

右衛門七は土下座をして謝っている。

「謝って済む問題じゃねえぜ。どうやって落とし前を付ける？」

叩き付けられるように座らされた俺は、腰抜け状態。恐怖、ではなく、会ってみたいと思っていた江戸時代のヒーロー8人に取り囲まれていたからだ。

「なぜ、人違いだと言わなかったのだ！？」

智紘に似た声。

「あなたに会えただけでよかった。少しでも長い間、あなたの傍にいたかった」

俺は、自分でも信じられないような言葉を吐いていた。

「なんだ？安兵衛殿の影武者は男色か？右衛門七は女と見まごう美少年だからな」

「右衛門七、てめえが始末を付ける。ちよつど良い練習にならあ」

「その前に、望みを叶えてやったらどうだ？」

物語では意味のある会話しかしらない彼らも、日常ではこんなくだらないことを言い合ったりしていたのだろう。

「くつ、お許してください。みなさま、お許してください」

と、右衛門七。

「許す訳にはいかねえ。お前が出来ねえなら、俺がやる。……大事の前の小事だ、悪く思ふなよ。付いて来い」

安兵衛は、右衛門七が被っていた深編み笠を俺に被せると言った。

俺は無言で付いて行く。逃げればいいだろうって？そんな気を起こしただけで瞬時に切り捨てられるだろう。どうせなら彼が思う場所がいい。これ以上迷惑を掛けたくないのが本音だ。

暗い川の畔に着いた。

「ここでいいだろう。なんで、逃げなかった？斬りかからなかった？」

「あなたに叶うはずがない」

「虫酸が走るぜ。おめえみたいな根性無しにや」

「俺もです」

「親兄弟は？」

「いません」この時代には。

「どこに住んでる？後で知らせてやる」

「言いません。みんなに迷惑がかかる」半次やお春の顔が浮かんだ。

「後ろを向け！」

毎年12月になると必ず親父が見ていた時代劇。つまらないと言いながら一緒に見ていたものだ。この、目の前にいる人は、俺たち親子共通のヒーロー、忠臣蔵赤穂浪士47士の一人、堀部安兵衛なのだ。この時から8年前の元禄7年、安兵衛は高田馬場で伊予西条藩土菅野六郎左衛門の果し合いに助太刀して有名になった。その一件を見ていた堀部弥兵衛一（安兵衛と一緒にいたじいさん）に望まれて養子になったのだ。生涯で2回の敵討ちをした男としても有名だ。18歳で江戸に出てきた彼は江戸に精通していたはずだから江戸中の豊職人を集めて一晩で豊替えをした話などが生まれたのだろう。だから俺はこの人達の修飾された物語を知っている。近い将来に起こる事実を知っている。

歴史を変えるつもりはない。名もない男がここで命を落としても、何も変わりはないのだ。

「笠をとつてもいいですか？あなたとそっくりだったなんて、親父に自慢出来ます」

月明かりに照らされた安兵衛の顔は、確かに俺とよく似ている。だが、中身は顔に表れるものだ。面構えというものがまるで違う。今の俺は半次が言ったように、ネジが2、3本弛んだ顔だ。10年後、俺もこんな顔になっていた。

安兵衛が刀を振り下ろすのが見えた。

暗転。

9 いい女

「今度はこんな趣味に走るとはねえ。お見限りな訳だ。……似ているって言えば似てるけど、あんたの方がずっと若い。お肌の張りが全然違う。うふふ、それにウブだしねえ。あたしが仕込んであげようか」

抜けるように白い肌、切れ長の目、平成ではほとんど見ない真っ赤な口紅、匂い袋なのか、鬢付け油なのか、甘いにおいが鼻腔をくすぐる。細くて柔らかい指が俺の身体を撫で回し、弄んでいる。これが江戸時代のいい女か。

小説でも読んでいるのなら夢のような話だが、実際は地獄。手足を縛られて、猿ぐつわを噛まされている俺は、声も出せずに女にしながらかかられているのだ。前にモテモテの侍の役がよかったと望んだが、こんなシチュエーションは望んでいない。

マジで死にそうだ。

殺してくれ!!

「お艶、いい加減にしねえか。そいつ、泡吹きそうだけ」

安兵衛は、お艶がすることを見ていたらしい。

お艶が安兵衛と特別な関係なのは、俺にしたことで察しが付く。

閉じ込められている部屋は、料理屋か旅館を思わせる広くて清潔な和室。床の間の花瓶には、深紅の椿が一輪生けられている。

「安さん!……だって、こんな置いてすぐに行ってしまうんだもの、寂しかったんだよ」

俺って、こんなの、なの?

「なんで殺さなかったんだい?」

「ん?」

「肩に酷い痣があった。峰打ちにしたんだろう?」

「気が変わった。無益な殺生をしなくても、ここにこうして置いておけばすむことだ」

「冗談じゃないよ！」

「好きにしていざ」

「え？」

お艶は嬉しそうな顔をして俺を見た。彼女は思い通りにならない安兵衛の代わりに俺をオモチャにするつもりだ。殺されてた方がマシだったかも。

俺は芋虫みたいにモゾモゾ這った。

「見る、逃げようとしてるぜ」

「お酒、飲むかい？」

「ああ」

後僅か。これが最後の逢瀬かも知れない。俺は、部屋の隅まで行って這いずり回るのを止めた。

外には寒月。

二人は俺の存在を忘れて、差しつ差されつつしている。

「お艶様！お艶様はいらっしゃいますか！！」

「うるさいねえ、坊や。様付けなんてしないでおくれ、くすぐったくてしょうがない」

「堀部様から、至急伺うように申し付けられました」

「2階にお上がり」

「いいえ。こちらにて、失礼いたします」

「取って食いやしないよ。坊やのお守りには飽き飽きしているんだ。来なきゃ話にならないんだよ」

「これは！？」

「あれ以来あんたがよそよそしいのが寂しいんだってサ。こいつを見せれば、あんたが許してくれるから、来たら見せると言われたんだ。……安さんたら、美形なら男でも女でもお構いなしなんだからお気を付け」

「それは、違うと思います」

そう、違う。事を成就させるためには、信頼関係は少しでも深い方がいい。不信感、拭える物ならば拭っておいた方がいいのだ。

偉そうに安兵衛と右衛門七の心理を解説している俺は、あの時より更に自由を奪われて、柱に括り付けられていた。

「生きていたのか」

「半分死んでます」。

お艶姉さんにオモチャにされたのは、あの日と次の日だけだが、仕打ちが恐くてずっとハンストを決め込んでいるのだ。4、5日、もう1日ぐらい経っているかも知れない。体内時計はすっかり壊れ、時間の感覚が無くなっている。

「そつだ！あんたからだったら、食べるかも知れないねえ。あたしが食べさせようとしても口を開けないんだよ。本当に強情なんだか

ら。……惚れ薬なんて入れてないのにねえ、ふふふ。お粥を作ってくるから、見張っていてくれるかい？」

恐すぎる。あと1日か2日の辛抱だ。絶対に食わない。

「私のせいで命を落としたものとはかり思っていた。……許せ、あと1日の辛抱だ」

あと1日。決行は今夜。

「俺は身振りで猿ぐつわを外してくれるように訴えた。どうにも出来ないことも知れないけれど、言っておきたいことがある。」

「大声で騒がぬか？」

俺は何度も頷く。

「どうしても今夜討ち入るのか？」

「堀部様は、そのようなことまであなたにうち明けているのですか？そこまで信頼されていながら、なぜそのような仕打ちを受けているのです」

「あの人からは何も聞いていない。俺も話していない。話せるものなら話したかった。あの日以来会ってねえんだ。……あなた、内匠たくみ頭のかみへに会ったことがねえんだろう？仕えていたのは親父なんだろう？なんの義理があつて一味に加わんなきゃなんねえんだ？」

「あなたは、私を知っているのですか？」

「矢頭右衛門七。47人の中で大石主税おおいしちからの次に年が若い」

「お主、何者だ！」

右衛門七は刀の柄つかに手を掛けた。

「切りたきや切れ、どうせ切られるはずだったんだ。全てを知っている上であなたに話している。俺は300年後の世から、間違っここに来ちまつたんだよ」

「信じられぬ！」

「信じたくなきゃ、好きにしろ」

「……本当に？」

「そうだ、俺たちだって、会社という藩みたいな所で働いて金をも

らっている。藩主や家老みたいな奴だっているけれど、奴らに命ま
では賭ねえ。藩が潰れちまったら他の藩に雇ってもらうまでだ。そ
ういう風に考えられねえか？」

「そういう人もいました」

「なんで一番若いお前が、もつと柔軟に考えられねえんだ」

「私は一人前の武士として認められたかった。大石様だつて最初は
私の参加を認めてくださらなかった。腹を切ると、私の方が脅した
のです。そろそろ行きます」

「さて、考え直せ」

「直せません。その答えはあなたが教えてくださった」

「？」

「300年後の世の、あなたのような人までが、私の名を覚えてい
る。それが答えです」

「名前なんて残ったって、死んじゃったならなんにもなんねえじゃね
えか！」

「私は、あなたのおかげで安心してお勤めに励むことが出来ます。

心残りは、もう少しあなたの時代のお話を聞いていたかったことで
す。お艶様！」

「あいよ」

お艶が階段を上がってきた。

「堀部様からの伝言です。お艶様のおかげで良い思いが出来ました。
身体と火の元に気を付けて元気でいてください」

「嫌だねえ、あの人ったら、どつか遠くにいつちまうみたいだ」

「はい、しばらく京に上るそうです。それから、このお方、明日の
朝に放してやってください。とのことですよ」

「よっぽど同じ所に同じ顔がいるのが鬱陶しいと見えるねえ」

「右衛門七、行くな！」

「あなたには、今しばらく眠っていただきましょう。あなたに
会えてよかった」

と、言うとき右衛門七は、俺の空きっ腹に拳をたたき込んだ。

間違われた男〔元禄編〕

暗転。

11 早朝の孤独

「起きな！あなたは、あたしと一緒に見なきゃいけない！」
お艶に威勢よくたたき起こされた。

外は明け切っていないが、大勢のざわめきが聞こえる。

通りに出ると、人々は道の真ん中を空けて、何かが通るのを待っていた。

一段とざわめきが大きくなり、火事装束を着た一団が現れた。

先頭の槍の先には、吉良上野介きらこうすけのすけよしひさの首が、ぶら下げられている。強欲、意地悪、塩の利権がらみ、地元では、今も残る黄金堤こがねづつみと呼ばれる堤を、私財を投じて築かせたという名君だと言われている……色々な説があるのだ。どっちにしても、老い先短いじいさんの、この最期は哀れだ。

義士達も血だらけ、早朝の空気は血生臭い臭いで満ちていた。

「安さん」

先頭集団にいた堀部安兵衛はこちらを見て、お艶と俺に笑いかける。初めて見る会心の笑顔だ。

「旦那ー！！なんて水くせえお人なんで。あつしに一言言ってくだされば、何なりとお手伝いをしたものを！」

通りの向こう側で、半次とお春が、安兵衛を追いかけている。

右衛門七が、こっちを見て一礼をした。

彼もまた、会心の笑顔。

あれほど無惨な死体を持って、あんな風に笑える彼らの心理は、現代人の俺にはわからない。大勢の死人や怪我人も出たはずだ。

喜びはしゃぐ江戸の町の人々の中、俺は一人、孤独だった。

このままこの町で、生きて行かなくてはならないのか。

ふわり。
ずっと飯抜きだった俺は、立ち眩みを起こし……。

11 早朝の孤独（後書き）

構想0日、執筆3日のこのお話。

時代劇フリークとしては、一度手を染めてみたかったです。が、時代考証がめちゃくちゃなのは、どうかお許しを。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0081d/>

間違われた男〔元禄編〕

2008年11月7日06時31分発行